

痴漢。非合意。ドS。近親相姦。調教。お仕置き。クリ責め。強制絶頂。

このままじゃダメだ。

まっとうな男性とまっとうな恋愛をするために、甘いちゃ屋さんでマゾを治そう。

土曜日、午後四時五分前。インターフォンが鳴ったので、いつものピンクベージュのリップをさっと塗り、んぱんぱと唇を重ねながら急ぎ足で玄関に向かう。初対面の人に会うんだから、会社につけていくような無難な色の方がいいだろう。

——でも、ちょっと地味だったかも。

——こういうタイプが女風使うんだ、って思われないかな。

急に不安に襲われる。けれど、苺ジャムのように鮮やかなとっておきの赤リップを選んでいたとしても、「いかにもスケベそうな派手な女って思われそう」と私は心配していただろう。三村茉央はそういう人間だ。

相手はプロなんだから、きつと見た目なんていちいち気にしたりしないはず。

そう自分に言い聞かせながら祈るような心地で玄関の扉を開けると、そこには大学

時代の後輩である佐伯颯大が、大きなレジ袋を手にとっていた。

「あは♡ お久しぶりです、三村先輩♡」

目尻にある泣きボクロがなければ、誰かは分からなかったかもしれない。

身長は最後に会った時——佐伯くんが二十一歳の時点で頭一つ抜けて高かったけれど、あの頃はまだ少年から大人に変わる直前の線の細さが残っていた。こんなに、ジムでしっかり鍛えてますみたいな筋肉のついた体ではなかったはずだ。

この状況でなければ、「大きくなった？」という親戚の子に対するみたいな言葉をかけていたかもしれない。

全然違う。心の中でそう呟いた。

「先輩、先輩」と私の後ろについて回っていた学生の頃は、人懐っこい仔犬みたい

で可愛いなと思っていたのに。

たった三年で、男の子ってこんなに変わるのか。

「さ、えきくん!？」

「はい、佐伯くんです♡」

「なんで……」

「なんでって、先輩が呼んでくれたんじゃないですかあ？」

甘い雰囲気の流れ目がふんわり細くなる。

ああ、名前を呼ぶとこんな風に笑う子だった。端正な顔立ちの正統派黒髪イケメンなのに、人懐っこくて愛嬌があって、老若男女全方位からモテまくっていた究極の陽キャ。

そんな佐伯くんが、なぜ女性用風俗に？

「はいはい、おじゃましますね〜♡」

「ちよっ、ちよっと！」

「あ、洗面所こっちでしたよね？ 茉央先輩、学生の頃すっごい気にしてましたよね。『手洗いうがいするまで、絶対に部屋入っちゃダメ！』って。俺、いい子だからちゃんと約束守りまあす♡」

こちらの動揺を気にする様子もなく、自宅かと思うほど迷いのない足取りで廊下を進んでいく。

「待ってよ！　なんで佐伯くんが来るの!?!」

慌ててシャツの裾を掴んで叫ぶように質問すると、佐伯くんは振り返ってきゅっと眉を寄せた。

「先輩が呼んでくださったんですよ、俺のこと」

そう言って、彼はポケットからパステルカラーの名刺を取り出した。

甘いちゃ専門店ジュ टीमガーデン スペシャルセラピスト そーた

「ほ、本名……」

「先輩だって本名で予約してるじゃないですか。マゾ治療特別コース百五十分でご予約のミムラさまー？」

「プラン名全部復唱する必要あった!？」

「あはは♡ そうですね、ごめんなさい」

ちっとも反省していなさそうな軽い調子で笑うと、佐伯くんはそのまま私の手をシャツから引きはがし、長い指で手の甲をすりゆすりゆと撫ではじめた。

「あ、かわいいー♡ 肩、びくって跳ねちゃいましたね」

「や、もう……やあ……」

「ええ？ 『やあ♡』なんですかあ？ こういうのがしたくて、甘いちゃ屋さんを呼んだんじゃないんですか？」

至近距離から覗き込まれ、熱を含んだ吐息が耳朵を掠める。あまりの気恥ずかしさ

に視線を泳がせると、彼は喉の奥を低く鳴らして微笑みを浮かべた。

「マゾなんだ、先輩」

「いや、これは、その……」

「マゾじゃなかったら、マゾ治療特別コースなんて頼みませんよね？」

一歩、距離を詰められる。狭い廊下はますます窮屈になり、一回り大きくなった彼の肉体が、圧倒的な威圧感を持って迫ってくる。

「俺に任せてください。結構評判いいんですよ？　そーたくさんの甘いちやマゾ治療」
「いや、あの、ち、チェンジとか……」

「あは♡ すみませーん、ミムラ様は初回フリー指名料金でのご案内なので、セラピ

ストの変更は致しかねるんですよねえ」

「ちゃんと規約読みましたかあ？」と呆れたように肩をすくめる仕草も絵になる子だ。もちろん読んでない。チェックボックスがあつた気もするけれど、「本番行為は禁止」みたいなことが書いてあつたということしか覚えていない。

とにかく、あの夜は勢い百パーセントだった。

せめてセラピストの希望を出しておけば、と後悔してももう遅い。佐伯くんは、それにねえ、とゆつたりと言葉を続ける。

「俺、結構評判いいんですよ。なんてったって、スペシャルセラピストなので。フリー指名で出会えるのはラッキー」

「っ……」

「得意なのはあ、おっきな身体を活かしたすっぱりハグと……包容量のある甘々キスと……ながあい指を使った……ふふ、この続きはカウンセリングのあとで、たつぷり教えてあげますね」

ご自慢の長い指先が、私の顎をそつとすくい上げる。

短めに整えられた指が、火照り始めた肌をそつとなぞった。そのまま頬のラインをくすぐるように這い上がり、耳の裏でびたりと止まる。

「かあわいい、ミムラ様の顔赤くなっちゃった」

「っ……！　なる、でしょ！　びっくりしてるの！」

「ふふ……リンゴみたい♡」

「う、るさい！　早く手洗いなさい！」

「はーい♡」

鼻歌まじりに手を洗い、うがいを済ませた佐伯くんは、リビングに入った瞬間に懐かしそうに声を弾ませた。

「うわ、懐かしー！ 先輩の部屋だあ！ 全然変わってない！——あっ！ この犬のクッション見覚えあります！ 俺、コイツのこと毎回枕にしてましたよね！」

佐伯くんは、柴犬の抱き枕をひょいと持ち上げた。

「えっ、そうだっけ……」

「そうですよお。一回よだれ付けたらすごい剣幕で怒られて、さっきの洗面所で

じゃぶじゃぶ洗わされましたもん。もおー、覚えてるの俺だけなんですかあ？」

唇を不満そうに尖らせた佐伯くんは、柴犬をもちもちと揉みしだいている。マシュマロみたいな手触りの柔らかい布地にまだ私の体温が残っている気がして、思わず顔が熱くなった。

正直、全く覚えていない。もし記憶に残っていたら、毎晩ぎゅっと抱き締めたり、誰にも言えない妄想に耽りながら顔を埋めたりなんてできなかったはずだ。昨日だって、女性風俗モノの作品を読んで予習に励んでいて――

（えっ、待って！ ああいうこと今からするの……!?!）

「ね、ねえっ！ 無理じゃない!？」

「何がですか？」

「知り合い同士でえっちなことするの！ やめとこうよ！ 同窓会行けなくなっちゃう！」

「うーん……そこはこちらもプロなので……」

佐伯くんは顎に手を当てて少し考えると、品定めをするように私の全身をゆつくりと眺め回した。

彼の視線が足首から膝、そして太もものラインをなぞり、ゆつくりとニットワンピースに覆われた胸元へ上がってくるたび、まるで指先で直接撫でられているような錯覚に陥る。

「うん、先輩ならいけます。俺、余裕です」

「なっ……」

佐伯くんはうんうんと頷いて、にっこり微笑んだ。

「女の人って、三年くらいですっごく変わるんですね……♡ こんな清楚な感じのおねーさんが実はマゾって、俺的にはめっちゃくちやぐつと来ますしい？」

「で、でも……」

「このまま帰ってもいいんですけど……そうなったとしてもご料金は頂かなきゃいけないルールなんですよお……お金、もつたいないですよねえ？」

マゾ治療特別コース、百五十分——三万一千円。

何も得られないままドブに捨てるには、確かに惜しい金額だ。

「それに、俺もお店の人に怒られちゃうかも……クビになっちゃうかも……どうしよう、先輩……」

困ったように眉を下げて私を覗き込む姿に、存在しないはずの犬耳と犬尻尾が見える。くうーん……と鼻を鳴らす幻聴まで聞こえそうだ。

この顔に何度乗せられてきたことか。私の家が溜まり場になったのだって佐伯くんが「三村先輩のおうちで宅飲みしたいですう」と言い出したことがきっかけだ。おかげで、あの頃は家に彼氏を全然呼べなかった。

それなのに、断ればいいだけなのに、佐伯くんの甘えた声に流されてしまうのは、昔も今も変わらない。

「よ、ろしくお願いします……」

あらかじめ用意しておいた、一万円札三枚と千円札一枚を入れた封筒を手渡すと、佐伯くんはパツと顔を輝かせた。

「やった♡ ありがと、先輩♡」

「ちよっ……！ 近い近い！ 抱きつくな！」

「いいじゃないですか♡ おれ、甘いちゃ屋さんなんだから♡」

伸びてきた腕をするりとかわすと、彼はわざとらしく「ちえー」と唇を尖らせた。けれど、無理に私を捕まえる気はないらしい。

「安心してください、そんなすぐに取り合って食ったりはしませんから」

「あ、そうなんだあ……」

「ふふ、露骨にほっとした顔しちゃって。お酒とかお菓子とか色々買ってきたから、まずは再会を祝して飲みませんか？」

そう言ってレジ袋の中身をローテーブルに広げはじめた佐伯くんは、薄桃色の缶を私に手渡した。

「ほら、これ先輩が好きなやつでしょ？」

「わ、懐かしい……！ え！ これ、どうしたの!？」

苺ヨーグルト味の缶チューハイは、大学時代に何本飲んだか記憶にない。それくらいこよなく愛していた。廃盤になったのか元から限定商品だったのかは分からないけれど、店頭で見かけなくなっただけ寂しい思いをした記憶が蘇ってくる。

「期間限定で復刻してるの、たまたま見つけたんですよ。ほら、先輩たちの卒論お疲れ様会した時に、茉央先輩、『私、水とこれだけあれば生きていける〜!』って言うってたじゃないですか」

「よく覚えてるね……」

「先輩のことなら、忠犬そーた、なあんでも覚えてます♡」

「またそんなこと言って……」

そう言えば、学生時代から思わせぶりな態度がデフォルトの子だった。

人の話をよく覚えていて、細かいところまで気が付く性格は、誰からも愛されるものだったけれど——この甘ったるい声で「可愛い♡」「すごい♡」と全方位に誉め言葉を大判振る舞いするからタチが悪い。

結果、何人もの女の子を泣かせてきた。そして、そのたびに私がフォローに回る羽

目になっていた。佐伯くんがゼミクラッシャーにならなかったのは、間違いなく私のおかげだ。

こんなに面倒見のいい先輩に対しても「デートしてください♡」とか「今日泊まってもいいですか♡」なんて、冗談めかして言ってくるのだ。私はいつも、ため息混じりに窘めていた。

「ねえ、佐伯くん。私は大丈夫だけど、他の子に言うとか勘違いさせちゃうから気を付けなさいよ」

学生の頃、何度も何度も口酸っぱく忠告した台詞を、社会人になってから再び口にするようになるとは。

対する佐伯くんは、あの頃と全く同じ「ボクはな〜んにも悪いことをしていません」

ん♡」とすつとぼける仔犬のような微笑みを浮かべた。

「先輩にしか言いません♡」

やっぱり。案の定。この女たらしっぷりは、一体これまで何人に向けられてきたのだろう。呆れ返っていると、佐伯くんはいたずらっぽく首を傾げて、私の目をのぞき込んできた。

「ねえ……これ、まだ好き？」

佐伯くんは、私の手の中にある淡いピンク色の缶を指先でトントンと叩いた。販売終了になった時はショックで、似た味のお酒をずっと探していた。自分でも

キョールを買って作ろうとしても、上手く再現できなかった。好きかと聞かれたら、
答えは迷わずイエスだ。

こくん、と小さく頷くと、佐伯くんは満足げに微笑んだ。



「それでね！ 『茉央ちゃんにはもっと違うタイプの男が合うと思うよ』 って振られたの！ 四年も付き合ったのに！ もっと早く言えよって話！」

「うんうん。それは元カレさんが悪いね」

苺ヨーグルトのお酒は、度数三パーセントと思えないほど回るのが早かった。

乾杯してから、まだ三十分くらいだろうか。すっかり出来上がった私は、溜まりに溜まった恋愛の愚痴をぶちまけていた。

「マチアプでドSの男の人探したら、変な人ばかり来るし！」

「……そんなことしてたんですか？」

「普通のアロマキャンドルに火つけて、そのまま垂らそうとするんだよ！ ひどくない？ 熱いじゃん！」

「わー、そういう奴は死刑にすべきです。うん。死刑だ。情状酌量の余地なし」

「……颯大くん、酔ってる？」

「ぜーんぜんでーす。酔ってませーん。茉央先輩みたいに酒癖悪くないんで、俺」

佐伯くん改め、颯大くん——「名前でご呼んでください♡」と強引に呼び方を変えさせてきた後輩——は据わった目で相槌を打ちながら、ハイボールの空き缶を片手でベコツとへこませた。

この動作、男の子ってみんなやるけど何か意味があるんだろうか？

飲み終わった缶だと判別するため？ それとも、ありあまるパワーを缶にぶつけているの？

「で、『普通のマトモな男と付き合うために、マゾを治すぞー!』という目的で当店をご利用いただいた、と」

「そういうことになります、ね……」

一人でも生きていけるこの時代。むしろ一人の方が自由でいいと思うこともある。けれど、私は好きな人と気持ちを通じ合わせたい。

普通のひと、普通に付き合って、普通に結婚したい。

もっと言うなら、ごくごくノーマルで多幸感溢れるらぶらぶえっちがしたい。そういう普通の恋愛で満足するために、マゾを治そうと思ったのだ。

私の熱弁を聞きながら、颯大くんは何本目かのハイボールの蓋を開けた。

「合コンとか——身近にいる、先輩のことをよく知ってる男に頼るとか……なんか、

他に方法あったんじゃないですか？」

「ムリムリ！ 私凄いだマゾだもん。知り合いに性癖開示なんかできる訳ないでしょ」

「そんなに？」

「そんなに」

「そっかあ……先輩、お一人で悩んでいたんですね」

その声が少しだけ低くなった気がして、思わずたじろいでしまう。

ローテーブルを挟んで飲んでいたはずの颯大くんは、いつの間にか肩が触れ合うくらい的位置に移動していた。

「いや、悩んでいたっていうか、性癖に振り回されていたっていうか……」

「いーえ、俺には分かります。先輩は、ずっと真面目で、しっかりしてて、色々考え

てて——それで、たまに極端な行動に出ちゃう」

「ふふ、極端で」

「極端でしかないでしょ。そういうところ、俺は見てて飽きないから大好きなんですけどね」

不意に、大きな掌が私の頭の上に載せられた。髪を整えるように、一定のリズムでするする指先が滑っていく。

「いいこ……いいこ……茉央先輩はたまに変なことするけど、本当にいいこ……」

「んあ……♡ な、んなのお……♡」

ゆったりと甘い声が、アルコールが回りはじめた脳に心地よい。

「ふふ、そろそろ楽しい飲み会はおーしまい。ここからは、甘いちゃ屋さんのはじまりです♡」

おどけた口調なのに、耳元に届く吐息には、確かな熱が混じっている。

そんなに甘く囁かれたら、身体の力が抜けてしまう。こてんと身を預けた颯太くんの身体は、やっぱり記憶にあるよりずっと分厚くて、頼もしい。

「先輩、お目目とろーんしてきましたねえ……♡ きもちい？ これ、好き？」

頭がふわふわするのは、お酒を飲み過ぎたせいかな、それとも颯太くんの手があたたかすぎるせいかな。

口の中に残った苺の香りと彼の匂い——サンダルウッドっぽい香水と男の人の匂

い——が混ざり合って、思考が甘くとろけていく。

「うん……すき……」

「じゃあもつと撫でてあげますね。よしよし……」

指先の動きはますます優しくなり、私はされるがまま、深く深くに沈んでいく。このまま瞳を閉じてしまつたら、きっとそのまま眠ってしまうだろう。

颯大くんは「寝ちゃダメですよ」と笑いながら私の耳の裏をくすぐった。

「ひゃっ！ も、もう！ いきなりやめてよお……」

「あはは、ごめんなさい。でも、寝ちゃつたらマゾ治療できませんから」

「うっ……それは、そうだけどお……」

「まずは、しっかりカウンセリングしていきましょね。先輩がどういうマゾなのか、俺に教えてくれますか？」

「ん……ええ……」

答えるのか。答えなければならないのか。

それって、三年ぶりに会う後輩に性癖を開示しなければならないってこと？

かぶり。答えを急かすように、颯大くんが私の耳たぶを軽く甘噛みする。そのままぬるりとした舌で縁をなぞるようにされると、背中がビクビクと震えた。

「あっ……♡ やっ、やあ……♡」

「いや？ やーなんですかあ？ こんなに気持ちよさそうなの？」

「ひうつ♡♡ んっ、んん、耳、みみ、弱いからあ……♡」

「もー……♡ 男にそんなこと言っちゃだめですよー……♡ 『もっとお耳いじめ
て♡』って言ってるようにしか聞こえませんかあ……♡」

ちゅ、ちゅぷ♡ ぐじゅ♡ ぐじゅ♡ ちゅ♡ ちゅ……♡

「ね、先輩……♡ 俺にだけ、こっそり教えて……♡ ぜったいに誰にも言いません
……♡ 先輩と俺だけの、ひみつにしますから……♡」

——私と、颯大くんの、ひみつ。

その甘美な響きが、アルコールで蕩けた脳に最後の一撃を加えた。

「あ、のね……♡」

もういい。全部言ってしまう。それもこれも、マゾを治すためだ。颯大くんなら大丈夫。なんてったって彼はプロなんだから――

「『こんなに濡らして、恥ずかしい子だね』とかあ……」

「うん、うん……」

「『勝手にイった悪い子には、お仕置きだよ』とか……そういうのお……♡」

「――そういうの、言われるの好きなの？」

「うん、すきい……くすくす笑いながら、からかわれるの、すごくいい……」

「あー……なるほどねえ……羞恥プレイ系ってことかあ……」

「やだあ……言わないでよお……」

言い終える頃には、私の顔は火が出るほど熱くなっていた。颯大くんの顔が見られ

ない。見たくない。低く喉を鳴らして笑う彼がどんな呆れ顔をしているかなんて、怖くて予想もしたくない。

「他には？　まだあるでしょ？　それだけなんてことありませんよね？」

「んんっ……♡　やあ、あっ♡　ああっ♡　はずかしいからあっ……♡」

「恥ずかしくないですよ……俺、ぜったーい引きません♡　いつも、どんなこと妄想してお股濡らしてるのか、ぜんぶ教えて……♡」

「やだっ♡　やめてえっ♡♡」

「言うまでやめなーい♡　ふふ、このまま続けたら、いちやいちやだけでイッちゃうかもしれないねえ？」

こしょこしょと内緒話をするように甘く囁かれ、腰が情けなく揺れてしまう。この

ままだと、本当に達してしまいそう。私の理性は、もうどろどろに溶かされてしまっていた。

「手首をガシッて掴まれたり、脚折りたたまれてえっ♡ 無理矢理っぽくされちゃうのとかっ、イってるのにやめてもらえないのとか、すきなのお……♡♡」

「なるほどねえ……そういう感じですかあ……」

「です……♡」

——沈黙。

急に静かになった室内に、私のハフハフという呼吸の音だけが響く。

……え、なに。引かれた？ あまりの恥ずかしさに、酔いが一気に冷めていくような感覚。恐る恐る顔を上げると、そこには——

「え、終わり？」

拍子抜けしたようにぽかんと口を開けた颯大くんがいた。

「う、うん。こんな感じ」

「うわぁ……」

そつぽを向いて口元を手で覆った颯大くんは「やば……」と独り言のように漏らし
ている。

そんなにヤバかったのか、私の性癖は。言わなければよかった。穴があったら入り
たい。

その時の私は、恥ずかしさで頭がいっぱいになっていたせいで、気づくはずもな

かった。手のひらの奥に隠された颯大くんの口元が、勝利を確信したように吊り上がっていたことに。

「ねえ、先輩」

長い指でしっかり掴まれてクイと持ち上げ、視線を固定される。

逃げられない。そう直感した。熱っぽい瞳から、甘い吐息から、颯大くん自身から。

「先輩ってえ、ほんとにマゾなんですかあ？ 痛いのはやだやだあ、酷いこと言われるのもやだやだあ……でも、ちょっと無理矢理っぽく気持ちよくしてもらえるのは、好き、すき♡ってさあ……俺からしたら、フツの可愛い性癖だと思いますけどお？」

営業スマイルみたいな甘い表情。そのくせ、口調には、私に対する明らかなからかいが混ざっている。

「ま、マゾだもん！」

かっとなって反論すると、颯大くんの口角はますます吊り上がった。

「ええ？　ほんとにい？」

「マゾなの！　マゾだから、フツの恋愛ができないの！　だから、治して欲しくて颯大くんを呼んだの！」

これまでの恋愛が上手くいつていないのは、私がマゾだからだ。

普通の男性からは敬遠され、独りよがりで身勝手な「自称ドS」の変な男ばかり引き寄せてしまう。

だから、マゾを治せば、きっと全部上手くいく。普通の男の人と、普通の恋愛をして、普通のえっちなで満たされて、普通に結婚できる。普通に幸せになれる。

——私は、ただ「普通」になりたいだけなのだ。

私は颯大くんを上目遣いで見上げ、叫ぶように懇願した。

「私のマゾを、治してよお……！」

その瞬間。スイッチが切り替わったかのように、颯大くんの顔から一切の笑みが消えた。

瞳はぞっとするほど暗く。ニヤニヤと楽しそうに吊り上がっていた唇は真一文字に

結ばれている。

「……普通、ねえ」

低く、地を這うような声。颯大くんはフーツと長く、息を吐き出した。顎を掴んでいた指先に、じわりと強い力がこもる。

（あ、逃げたい――）

本能が叫ぶ。お腹の奥がキュンとひくついてしまう。怖い。よくない。でも、すごく、すごく興奮する。

沈黙が、永遠のように感じられた。

颯大くんは何度か瞬きをした後、再び笑顔に戻る。

「わかりました、一緒にマゾを治していきましょうね」

そして、私の背中に大きな掌を回すと、ぐっと自分の方に引き寄せた。

「まずは——恥ずかしがり屋さんを治していきましょいか」

「えっ」

「先輩って、恥ずかしいと興奮するタイプのマゾですよ？　それって、『恥ずかしいのがきもちー♡』って脳が勘違いしちゃってるからなんじゃないかなあ」

「そう、なの……?」

「そんな先輩には、うちの店がぴったりです。うちの店のマゾ治療プランはね……こ

うやって、なでなでしたり、ぎゅーってしたりしてえ……フツの恋人みたいな
ちやいちゃが一番きもちー♡って女の子の体と心に教えてあげるんです……♡」

しっかりした弾力のある胸板に鼻先が埋もれる。私の方が年上なのに、後輩の颯大
くんに甘えているみたい。こんなの恥ずかしい。

（ああ、こういうことか）

颯大くんの言う通り、私は何でも恥ずかしがってしまう。きっと、自意識過剰なの
だろう。

そして、恥ずかしいことが好きすぎる。だって、恥ずかしいことの後に気持ちいい
ことが来るのは、お約束だからだ。

「今からするのはね、恋人同士のいちゃいちゃですよお♡」

「んっ♡ 恋人同士のお……？」

「はい♡ 今から、先輩は俺の彼女……♡ これからするのは、恋人同士がするフツーのいちゃいちゃ……♡ 恥ずかしいことなんて、なあんにもしません……♡」

「あっ♡ ひうっ♡♡」

とびきり甘い声で鼓膜を揺らされ、ゾクゾクとした震えが止まらない。

「だから、恥ずかしがらないでね♡ セーんぱい♡」

ふわりと抱き上げられ、ベッドまで運ばれる。運ぶと言っても、学生の頃から住んでいる小さな1Kの部屋は、ローテーブルからシングルベッドまで三歩もない。

あつという間に、大きな体に組み敷かれてしまった。さっきまで、大学時代に戻ったように平和なサシ飲みをしていたはずなのに、何もかも夢みたいだ。

「このワンピース、すっごく可愛いんですけど……脱がしてもいいですか？」

ニットで覆われたデコルテに、長い指先がそっと触れる。天井のライトを背にした颯大くんは、顔に影がかかっているぶん、夜の獣みたいにギラリと光る瞳が目立つ。

（こんなの、許可を取る顔じゃない——！）

「や、だって、言ったら……？」

「んー？ 嫌なんですかあ……？」

冗談めかした口調のまま、彼の大きな手が私の膝に置かれ、裾から指先がするりと入り込んできた。

「それなら、下から手を突っ込んで、さわさわしましょうか……♡」

「ひゃっ……！ あっ♡ ちょっ、とお……っ♡」

「先輩の脚、真っ白ですすべですねえ……♡」

膝小僧を撫でたかと思うと、太ももを這い上がり、あっという間に足の付け根に到達した。腰のあたりまで裾がまくれ上がったせいで下着が丸見えになってしまう。

今日のために新調した淡い色のショーツを見て、颯大くんはうっとり目を細めた。

「パンツ、かあわいい……♡ 茉央先輩、こういうの穿くんだあ……えっち……♡」

まじまじと観察されたせいで顔が熱い。見られても困らないものを買ったはずなのに、いざ見られるとなると手足をバタつかせて抵抗したくなるってしまう。

「せんばあい、暴れないでください♡」

「あっ♡ やだ、やだあ、見ないでえ……♡」

「なんで？ どうして見ちゃ駄目なんですか？」

「……っ、ふ、ああ♡ は、はずかし……っ♡ あっ……」

思わず口走ってしまった言葉に、颯大くんの目がキラッと光った。

「俺、別に恥ずかしいことしてませんよね？」

「あっ♡ ああっ♡ だめっ♡ パンツひっぱらないでえっ♡」

「変なことじゃないよね？　可愛い恋人の可愛い下着を褒めてるだけ♡　っん、っん、っーん♡　ってちっちゃいリボン触ってるだけ♡　ほらあ、全然恥ずかしくなあーい♡　やだやだしなあーい♡　これは、普通のいちやいちゃでーす♡」

おへその下にあるサテンのリボンを、いたずらっぽくつまんで、離して。繊細な刺繍を指先で辿って。

普通の恋人はこんなことをするんだろうか。元カレも、マッチングアプリで出会った男性も、こんなことをしなかった。それじゃあ、彼らは普通じゃなかったってこと？　いや、そんなはずがない。だって、私の足の間は、普通のセックスじゃありえないほど、はしたなく蜜を零してしまっているのだから――♡

「先輩、腰ずうっと浮いちゃってますね♡　これ、好き？　きもちい？」

「あああっ♡ 言わないでっ♡♡ やだっ、やだっ、はずかし……ひ、あああっ♡」

「だから、『恥ずかしい』は禁止ですー♡ お仕置きにもーつと撫でちゃいますー♡」

颯大くんの手はさらに下へと滑り、濃い色の染みができはじめたクロッチを、とんと優しくタップする。

「あれれ？ セーんばい、こーこ♡……なんだかすごく、硬くなってますよお？♡」

ゆるい丘のように盛り上がったそこには、薄い布一枚を隔て、熱を持ってぷっくりと膨らんだクリトリスが隠れている。

わざとらしく首を傾げながら、彼はその突起を、揃えた人差し指と中指で押し潰すように、ねっとり愛撫しはじめた。

ぐちゅぐちゅぐちゅ♡
ぬちゅぬちゅぬちゅ♡
くりゅくりゅくりゅ♡♡

下着越しにクリトリスを圧迫するのは、いつものオナニーと同じだ。でも、いつも
のオナニーとは全然違う。

指が動くたびに、頭の奥がびりびり痺れる。吸い寄せられるように腰が勝手に持ち
上がる。

自分ですると、他人にされるのは、こんなに違うのか。

「すごいすごい♡ 気持ちよくなるの上手ですね♡ クリトリスがビンビンに勃
起して、テント張ってる♡ かあわいい♡ ちっちゃいおちんちんみたいですね♡」
「あああ♡ んあ♡♡ あ、これ、すごいいい♡」

「ふふ、すごいんだ♡ もっと、もおっと、くちゅくちゅになりましたようねえ……♡」

颯大くんは私の顔を覗き込みながら、濡れて透けた布地の上から、クリトリスをピン♡ピン♡と弾いた。

「ねー♡ 直接触っていい？ 俺の指ねえ、女の子のポルチオまで届くんです。もちろん、いきなりガシガシなんてしないから、安心してくださいね。まず最初は当てるだけ。そこから、ちょっとだけゆーら、ゆーらするの……♡」

「あ、ああ、あ……♡♡」

「それでねえ、そのあととはちんぽみたいに、浅い所……深い所……また浅い所お……って、やさしくピストンして、おまんこの気持ちいいところぜーんぶ可愛がるんです……♡ もちろん、Gスポットもたくさん擦ってあげますから、いーっぱい潮吹きアクメしていいんですよ……♡ 俺、昔みたいに頑張って、お洗濯手伝いますから……ね？」

颯大くんは、決して急がない。私の耳たぶを甘噛みし、首筋にちゅっと深く吸い付いて、下着越しのゆるい愛撫を続ける。

クリを揺らされ、秘裂をなぞられ、頭がおかしくなってしまうようなほど気持ちがいいのに、決定的な刺激は与えてもらえない。

（ほしいっ♡ 直接おまんこしてほしいっ♡ 恥ずかしいなんて言ってられない……♡）

こくと頷くと、重たく蜜を吸い込んだショーツを一気に足から引き抜かれた。途端、解放されたそこから溢れる情欲の匂いに、颯大くんが「……すごい♡」と息を呑む。

彼の熱い視線を受け止めながら、私はゆっくりと足を開いた。

「おねがい……っ♡♡ お、まんこ、触って、ください……っ♡♡」

クイクイと、誘うように腰をくねらせると、愛液が太ももを伝う。てらてらと妖しく光るそこを、こんな風に男性に見せつけたことなんて、今までだったら恥ずかしくてできなかったはずなのに。

ごくり。生唾を呑む音がしたかと思うと、颯大くんの指がその泥濘にそっと沈み込んだ。

「ひ……っ！ あ、あああっ！♡♡♡」

「すごおい……♡ 中、とっても熱くてとろとろ……♡ ふふ、きゅうきゅうに締まって、俺の指を食べてるみたい……♡」

「あ、あ……っ♡ しゅごっ♡ これ、しゅごいいっ♡♡ 入り口、くちゆく

ちゅってえ♡♡♡」

「うん、うん……♡　すごいよね♡　きもちいですよね♡」

「ああああっ♡　しゅごっ♡　しゅごいいっ♡♡♡」

「あはは、気持ちよくて呂律回らなくなっちゃったあ♡　おまんこくちゅくちゅ、しゅごいしゅごいですねえ♡」

「ンやあああっ♡♡♡」

一人でする時は、もどかしい刺激に我慢できなくて、すぐにGスポットを探ってしまふから、入り口にこんな性感帯が集まっているなんて知らない。途切れ途切れにそう伝えると、颯大くんはほんのわずかに眉根を寄せた。

「ふーん、他の男は全然触ってくれなかったの？」

「あああ♡♡ うん♡♡ うん♡♡ そうだよ♡♡ みんな、奥、いっぱい♡♡
いっぱいしてくれたの♡♡♡ 奥、よわいつ、からあ♡♡♡♡」

「そっかあ——」

下手くそばっか。

ぽつりと吐き捨てるように、颯大くんが呟いた気がした。ぐちゅぐちゅ♡ぐちゅぐちゅ♡と浅瀬をかき回す派手な水音にかき消され、確認しようにも余裕なんてなかったけれど。

「っ、は、あああ……！ そこっ、そこ、へん♡♡♡ へんになりゅ♡♡♡」

「そうですね♡♡ 今まで全然触ってもらえなかったから、変な感じしますね♡♡
ここも、先輩のきもちーところ♡♡ もっともつと気持ちよくなりたくなっちゃう欲張

りさんスイッチ♡」

「ああっ♡ なっ♡♡♡ だめ、だめっ♡♡ おくっ♡ 奥もちゃんとさわって
よおっ♡♡♡」

「まだダメですー♡ 奥をずぼずぼするだけなら、バイブとかデイルドみたいな偽物
ちんぽでもできるでしょ？ ほんとの恋人えっちはねえ、こうやっておまんこのぜー
んぶ可愛がってあげなくちゃ♡ ——それでね、ここを、こうして……クリも、
ぎゅーって挟んじやうの♡」

「ひっ、ひぎゅッッ♡♡♡ ゴおおッっ♡♡♡」

ぷっくり膨らんだ突起を、ぷちゅ♡♡と親指の腹で潰される。内側をくすぐる指と
連動するように、ぐりぐり♡ぐりぐり♡圧迫されると、目の前がチカチカするくらい
気持ちいい。

(あ、あ、だめえっ！ それ、いっちゃうっ！ クリトリス、ぎゅーでいっちゃううう
うっ！♡♡)

「んー……イきそう？ いいですよ♡ イッて♡ いっちゃえ♡ イけ、イけ♡
可愛いイキ顔、俺にだけ見せてね♡」

「ひゃああああっ！？♡♡ あああああっ……♡♡♡♡♡」

雷に打たれたような衝撃が背骨を駆け抜けた。

視界が火花を散らす。腰が大きく跳ね上がり、つま先までピンと硬直する。

ぷしっ♡ ぷしゅっ♡ ぷしゅっ♡ しょうろ……♡♡

「……あ、すごい♡ いっぱい、潮、吹いちゃいましたね……♡♡」

尿道から噴き出した透明な液体がシーツを濡らすのを見て、颯大くんは私の耳元で満足そうに囁いた。

(す、ご、かったあ……♡♡)

なるほど、これが女性用風俗。これが甘いちゃ屋さん。こんなに、魂まで抜かれるほど気持ちいいことをしてもらえるなら、三万一千円なんてむしろ安すぎる。

全身の筋肉が溶けてしまったかのように、ベッドに沈み込んで呆けてしまう。

「気持ちよかった？」

「う、うん……」

「よかったあ……ふふ、先輩のおめめ、とろとろでかあわいい♡」

甘い声が鼓膜を揺らした、その直後。

ぐちゅんつつっ♡♡♡♡

「っ!?!?!? ひっあああ!?!?!?♡♡♡♡」

ナカに埋め込まれていた指が、いきなりぐっと最奥まで沈み込み、行き止まりを探り当てた。

突然の刺激に目を白黒させていると、颯大くんが視線を合わせてくる。

「男の前でおまんこぺろーんってして、ぼんやりしてちやダメですよお♡」

「……っ、ふ、ああっ!?!? まって、まってえっ♡♡ そこ、だめ♡ こわいっ!?!♡」

「こわくないですよお……。ほら、ここ、さっきよりずっと柔らかくなって、俺の

指を欲しがってます……♡」

「んにゃあああああっ！？♡♡」

かりりと耳たぶを噛まれ、浅いところ、深いところ、また浅いところ。指をペニスに見立てているような、激しいピストンで責められる。

再びぷしぷし♡潮を吹きながら達してしまっても、颯大くんの手は止まらない。ぐちゅり、ぐちゅり♡♡蜜と潮を混ぜ合わせ、おまんこに塗り込めるような動きが続く。

「そお、そおたくんつつ♡♡ もう、いったあ♡♡ いったばかりだからやああっ！♡」

「そうですね♡ イッたばかりのおまんこ、ずばずばされると困っちゃいますよねえ♡♡」

「あ、ん、あぁっ♡♡　そこ、あ、だめえっ……♡♡　奥、だめええっ！…♡♡」

「『奥もしてしてえ♡　あんあ♡ん♡　そーたくん♡　ちゃんと触って♡』って
おねだりしてたの、先輩でしょー？」

「ああ♡♡　してにやいっ♡　そんなこといわないいっ♡♡」

「言ってました♡　自分の言葉には責任持ちましょうね、せーんぱい♡」

「ひ、あああぁっ♡♡　やだ、や、だ、それえっ♡♡　いってりゅっ♡♡　あ、あ、

あああぁ♡♡♡　ちゅらい♡♡♡　ちゅらいかりゃっ♡♡♡」

「ふふ、ちゅらくな♡い♡♡　イク時は『ちゅらい♡♡』じゃなくて、『あんあ♡ん♡
そーたくんの甘いちゃでイッちゃう♡♡』って言うてくださいいね♡」

ガクガクと痙攣し、蜜を吹き出し続けるおまんこを、颯大くんの長い二本の指が
じめ抜く。絶頂の甘い余韻に浸らせてくれる気はないらしい。

（あああ♡♡　ずっと、ずっとイッてるぅ……っ♡♡　このままじゃ、ほんとに、ほんとに、おかしくなるぅ……っ♡♡）

目玉がぐるとひっくり返りながら絶頂を続ける私の耳元で、颯大くんがふっと温度の低い声を落とした。

「ねえー、なんかあ、ずーっとマゾイキしてません？」

「え……っ、ひう……っ、やあ……っ♡」

顎をくいと持ち上げられ、熱に浮かされた視線を強引に固定される。

「なんかあ、『そーたくんは無理やり犯されてるぅ♡』って脳みそバグらせながらイッ

てません？　これ、恋人同士のフツのいちやいちゃんなんですけど？　ぬるーいマゾなんだから、マゾアクメ禁止♡♡　恋人アクメしましょうね♡♡」

「あ、ああ……しない……こい、びと、どーし……こんなこと、しないい……♡」

「ふふ、しまあす♡」

嘘、嘘だ。

イッたばかりのおまんこをぐちゅぐちゅ♡かき回し続けるなんて。風が吹くだけでイッちゃうくらい敏感に仕上がったソコを、いじくり続けるなんて。

普通の恋人は、こんなことしない。しちやダメだ。

（こんな、宇宙まで吹っ飛んでいっちゃうような、脳みそが沸騰して蒸発しちゃうような、めっちゃめっちゃな快楽が続くのなんて、絶対フツーじゃない……♡♡）

もしこれが「普通の恋人」のすることだと言うなら、世の中の女の子たちはみんな、腰をガクガクいわせて、涎をダラダラ垂らして、おしっこみたいに潮を吹き出しながら生きてることになってしまう。

最後の力を振り絞って、分厚い胸板を押して抵抗する。びくともしない。岩を押しているみたいで、圧倒的な体格差を思い知らされる。

「もう全然力入ってないじゃん……♡ よわよわだなあ♡」

指でポルチオを揺らしながら囁く言葉はぞっとするくらい甘く、淫靡に、私の脳を溶かしていく。

「抵抗しちゃダメ♡ これは恋人同士の甘い♡いちやいちゃ♡なんです♡ 先輩

はこういう普通のいちゃいちゃで、ちゃんと気持ちよくなって、ちゃんと幸せアクメ
できるようにならなきゃダメだからね♡」

「こいびと、どうし……っ、あ、んうううっ♡」

「そう♡ ほら、自分でも考えてみて？ 恋人同士なら、どんな風にいちゃいちゃする？ 可愛い彼女は、彼氏にどんな風に甘えます？」

頭の中で、颯大くんの言葉がぐっぐっ煮えている。

恋人同士。可愛い彼女。甘える。普通。

どうすれば、私は普通になれるの？ どうすれば、幸せになれるの？
必死に正解を探そうとした、その時だった。

(あ……♡♡)

おへそまでまくれ上がったワンピースの下。晒された私の太ももに、びっくりするくらい硬い物が押し当てられている。

一瞬、ポケットにスマートフォンか何かが入っているのかと思った。違う。そんなわけがない。ズボンを突き破りそうなくらい膨らんでいて、火傷しそうなほど熱を帯びているスマートフォンなんてあり得ない。

恐る恐る視線を上げると、そこには――これまで見たことのない、欲情に歪んだ颯太の顔があった。

愛嬌のある仔犬でも、人懐っこい大型犬でも、甘いちゃ屋さんでもない。彼の瞳の奥でギラギラ輝いているのは、目の前にいる女をめっちゃくちやにしたいという、男の人の欲望そのものだ。

（颯太くんも、私と同じ……っ♡♡ 興奮してるんだ……♡♡）

背筋をゾクゾクするくらいの喜びが駆け抜ける。

怖い、恥ずかしい。けれど、目の前にいる男の人が、私でこんなにおちんちんを大きくしてくれていることが、たまらなく誇らしくて、嬉しくて、愛おしくて――

（触りたい……♡）

私は指先を伸ばし、ズボンの上からその熱い塊を、そつと包み込んだ。

「っ………！　せんぱ………っ」

颯大くんが息を呑む。それと同時に、私の手のひらの中で、猛り狂った熱い塊が、びくんっ♡と大きく跳ねた。

「ああ……だめ、せんぱい……♡」

「そーたくん……かわいい……♡」

すり♡すり♡とそこを撫でると、鼻にかかったようなちよつと情けない吐息が形のいい唇から漏れた。

（颯大くんの唇、美味しそう……）

しっかりリップケアをしているのだろう。思わず触れてみたくなるくらい、ふっくらプルプルしている。私はちよつとだけ力を込めてキュッ♡とそこを握りながら、颯大くんの口端に自分の唇を押し付けた。

ちゅっ♡ 軽い音を立てて離れる。キスだともキスじゃないとも言いつけるくら

いのずるい口付けに、颯大くんは目を見開いた。

「……………？　これ、いちやいちや……………っ？♡」

余裕ありげに見せたくて甘く囁いたつもりだったのに、上ずった声が出てしまう。情けない。私の方が先輩なのに。年上なのに。これじゃあ精一杯なのがバレバレだ。

「……………っ、ああ、もう……………♡」

視界が彼の影に覆われたかと思うと、にゆるん♡と熱い舌が口内へ侵入してきた。

「んっ……………♡　　あは、先輩のくち、あつまあ……………♡♡　　いちごの味……………♡　　すっごい

お酒のにおい……♡」

ぐちゅ、ぐちゅちゅく……♡ ぐちゅうう……♡ れろ、れろれろお……

唾液をぐちゃぐちゃにかき回し、肺の空気さえも根こそぎ奪い去っていく。頭が真っ白になるような深い舌吸いのリズムに合わせるように、おまんこの中の気持ちいい場所を指が揺さぶっていく。

（ひ、あああ♡ お口もおまんこも全部きもちい♡ ああ、これ、しあわせえ……♡♡ 今までえっちしてきた人たち、こんなことしてくれなかった♡ 颯大くんのちゅーは全然ちがう……♡ すごっ、しゅごすぎて、脳みそとろけちゃう……♡♡♡）

「ふ……っ、はあ……♡ ねえ、わかる？ すっげえ音立てて俺の指に吸い付いて

る……♡ ほら♡ ほら♡ おまんこ大喜び♡ 恋人同士のいちゃいちゃ、すっごく、すーっごく気持ちいいですねえ……♡」

じゅぷり♡と濡れた音を立てて耳朵を食まれる。嬌声をあげて仰け反ると、颯大くんは楽しそうに笑った。

「ね？ 男に雑に扱われるより、こうして大好きな彼氏といちゃいちゃするのが一番気持ちいいですよ♡ マゾ願望なんて忘れちゃお♡ 無理矢理とか、お仕置きなんて期待しちゃダメ♡ わかったら、可愛く『はぁ〜い♡』ってお返事してください♡」

「おっ♡♡ はあっ♡♡♡ わかった♡ わかったからあっ♡♡」

「ほんとに分かってるのかなあ……？ なんか、適当にお返事してない？」

「してないっ♡ してないいい♡♡♡♡」

「ふふ、先輩は、全然マゾじゃありません♡ 『ちょっと強引に犯されてみたあゝい♡ いっぱい気持ちよくなりたあゝい♡』っておまんこぐしよぐしよにしてるだけの、ただのわがままドスケベお姉さん♡ ちょっと性欲が強すぎるだけの、ノーマルで可愛い性癖♡ こんなんでマゾ名乗ってたら、本当のマゾの人に怒られちゃいますからねえ？」

「おっ♡♡ そこっ♡♡ ダメ、ダメえっ、ひううっ♡♡」

「大丈夫ですよ♡ だめじゃない♡ 先輩はマゾじゃない♡ 可愛い、可愛い、おれの彼女です……♡ すき、すき、すき……♡」

大きな掌が私の頭に乗せられ、あやすように撫で上げる。優しい手付き。とろけそうな眼差し。一瞬、私たちは本当の恋人なんじゃないかと錯覚しそうになる。

その優しい愛撫に身体力がふっと抜けると、颯大くんの顔が近づいて来た。
奪うように唇が重なる。

「ん……っ、ぐんうう……っ♡♡」

「せんぱい……♡ すき、すき、せんぱいっ……♡」

じゅうう、れろ、ちゆるう……っ♡ ぐちゅ、れろれろお……っ♡♡ じゅぷっ、
ぐじゅ、ぐじゅるううっ！♡ ちゅぷ、ちゅくちゅく♡ れろお、ぐんぐんうううっ！！
♡♡

（あ、ああ……っ♡ お口もおまんこも、そーたぐんに、ぜんぶ、ぜんぶ食べられちゃ
うう……っ♡♡）

分がどこにいるか分からない。快樂の渦に溺れてしまいそうになる。

本能で何かにしがみつきたくなって、目の前の颯大くんにぎゅっとしがみつくと、彼の喉が獣のように低く鳴った。私を抱きしめる腕に、骨がきしむほどの力が込められる。

「せんぱ……っ、まお、せんぱい……っ！」

——ビクッ、ビクンッ!!♡♡

太ももに押し当てられていたソレが爆発するように激しく脈打って、それから厚い布越しにじゅわぁ……っ♡と熱い迸りが広がっていくのを感じた。

きつと、彼の下衣の裏側は、今大変なことになってしまっているはずだ。私の溢れ

出した蜜や、勢いよく吹き出した潮でびっしりと濡れそぼってしまった表側も、か。お互いの内側から溢れ出した淫らな証が、布の上でひとつに混ざり合う淫靡な光景を想像しながら、私は彼と深く唇を重ね続けた。

「え、てか、大丈夫なの？ 服とか貸す？」

「ん〜？ あー……着替え持ち歩いてるから安心してください」

元カレさんの服なんて死んでも借りたくないんでえ、と語る颯大くんはここに来た時の軽やかさをすっかり取り戻している。

出すものを出してスッキリしたということだろうか。いわゆる賢者タイムというやつか。

それでも、腕枕をしながら髪を撫で続けてくれているのは、さすが甘いちゃ屋さん
と言うべきだろう。アフターケアまで完璧な、甘くて、とろけるような時間だ。

「どうでしたか？ 俺の甘いちゃ——満足、してくれた？」

私は、彼の腕の中でこくりと頷いた。

「……っ。すっごく、気持ちよかったです……」

否定できるはずもない。控えめに言って、最高だった。

「よかったあ……先輩に満足してもらえて、俺も嬉しいです♡」

ちょこんと私の肩に顎を乗せて、甘えるように鼻先をぐりぐりと押し当ててくる。さっきまであんなに雄み全開だったくせに、事後になった途端にこれだ。ここぞとばかりにわんこ系を出すのが、あざとすぎる。

「で、でもさあ——」

肝心のマゾが治っていない気がする。というよりも、なんだか悪化した気がする。

「はあ？ まだそんなこと言ってるんですか？ 先輩、マゾじゃないでしょ？」

「そ、そうだけどさあ！」

「ん〜？ もしかしてえ、俺のせいで本物のマゾに目覚めちゃったってこと？ あー困るなあ。当店は『甘いちゃ専門店』なので、DM女の調教コースなんて扱ってない

んですよ」

「~~~~っ！もうっ！」

「はい♡ わかってますよ、先輩はあ、重度のぬる〜いマゾ♡」

「それなんか矛盾してない!？」

「してませ〜ん♡ 自分のことをドマゾだと思ってる重症ぬるマゾは、一回の治療では治らないみたいですねぇ」

真っ赤になって抗議する私をからかっていた颯太くんは、突然ぽつりと呟くように尋ねた。

「ねえ、先輩って——大学時代と連絡先、変わってないですよ？」

「連絡先？ うん……変えてない、けど」

「……よかった。ずっと繋がるか不安だったんです」

「それ——」

言葉の真意が掴めなくて戸惑っていると、颯大くんの大きな掌が私の頬を包み込んだ。あんなに深く、何度も、お互いの唾液を混ぜ合うみたいなキスをしていたのに。真剣な眼差しで見つめられると、身体が強張ってしまう。

「だったら、次は直接連絡してください。先輩の都合の良い時に。そーたくんは、二十四時間、三百六十五日、真夜中だってマゾ治療に駆けつけますから」

「あ、あの……それって、お店を通さずに……ってこと……っ?」

「あは、まさかぁ♡ もちろんお店は通してくださいね? ただ、先輩の予約だけは、俺が最優先でねじ込むってこと。先輩は、特別な——お客様ですから」

特別。お客様。

嬉しいような、ちよつとだけ胸の奥がチリツとするような、不思議な気持ちに襲われる。

「どうして……」

「うーん……先輩に、恩返しをしたいから？」

私の困惑を楽しむように小首を傾げ、颯大くんはひどく優しい微笑みを浮かべた。

「——どうせ、覚えてないでしょ」

「……ごめん」

「いいんですよ、先輩は忘れてて。その代わり——」

彼は私の額に、誓いを立てるような、甘いキスを落とした。

「いつか思い出したら、その時に教えてくださいね。せーんぱい？」

そう言った颯大くんは、私の鎖骨の辺りに甘えるようにぐりぐり顔を埋めてきた。撫でろということだろうか。やっぱり大型犬だ。

求められるままに、彼の黒髪をそつと撫でる。ふわつと柔らかそうに見えた髪は、セットのワックスが残っているせいか、手のひらで触れると思ったよりもゴワついている。

髪の隙間からふわつと香る彼の匂いと、素肌に触れる熱い吐息に、私の身体はまた、心地よく蕩けてしまいそうだった。